

瀬戸SOLAN小学校第1学年・学年通信



## 視力検査だけでは三エナイもの

聴力検査、視力検査、身体測定が終わりました。

自分の体のことを知っておくことは、学習を進める上でもとても大切です。

視覚、聴覚、体感覚など、私たちは様々な感覚を使って日々生活をしています。

そして、その感覚は一人一人見事にバラバラです。



例えば、聴覚過敏と言って、音に対して非常に敏感な人がいます。

その人にとっては、小さな音でも気になって仕方がないといったことがいろんな場面で起きます。

時計の秒針の音が気になったり、水槽のポンプ音が耳障りでしょうがなかったり。

その一方で、聴覚鈍麻といったケースもあります。

音や声の中々入らず、より大きな音声でなければ注意が向かないケースがあるということです。

こうした感覚の違いは人それぞれあるわけですが、それに自分で気づくまでには時間がかかります。

ましてや、小さいころにはその違いを言語化して誰かに伝えるというのは至難の業でしょう。

これから諸々の感覚についてはその都度詳しく語る機会があると思うので、今回は「目」に絞ってお伝えします。

目の問題も、学習に即影響を与えるものです。

人間は情報の約8割を目から得ているため、視野がぼやけていたり、像がうまく結べない状態では、大きな負の影響があります。

目だけでなく、精神的にも常にストレスや負荷がかかってしまうからです。

とても大切な話なので、視力検査について、少し突っ込んで書いてみます。学校で行う「視力検査」。

実は、この検査では、目の機能のほんの一部しか調べることができない現状が存在します。

学校の視力検査は、

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>① 「遠くにある」、</li><li>② 「止まっている」「一つの文字」を、</li><li>③ 「片目でみる」</li></ul> |
|--|

検査です。

しかし、授業は遠くも見れば、近くも見ます。

（“遠くの黒板” と “近くのノート” など）

視点は一点を見つめるばかりでなく、頻繁に動きます。

（音読でも計算でもそうですし、音楽でも体育でもそうです。）

また一つの文字だけでなく、いくつかの「文字列」や「情報の集合体」を

まとめて見るものがほとんどです。

そして、言わずもがなですが、片目を塞いで授業を受ける人はいません。  
(両目を使って像を作るというのも大切な力です)

「視野を広くとり、視線を少し次に送る」

このわずか一点だけをとっても、授業中にその力を使う頻度は極めて高いものがあります。

これは楽器を演奏するときにも同じことが言えますが、その音符だけを追っただけでは流れるような演奏はできません。

少し先に視線を送り、音の並びが見えているからこそ、速いパッセージや複雑なフレーズを演奏することができます。

つまり、音読一つとっても、それをスラスラできるようになるためには、目の機能をいくつか組み合わせて使う必要があるということです。

例えば、下の画像の文字を読んでみて下さい。

むかしむかし、あるところに、おじいさんと  
おばあさんが住んでいました。  
おじいさんは川へしばかりに、おばあさん  
は川へせんたくに行きました。  
おばあさんが川でせんたくをしていると、  
ドンガラコ、ドンガラコと、大きな桃が流れ  
てきました。

他にも、次のようなパターンではどうでしょうか。

むかしむかし、あるところに、おじいさんと  
おばあさんが住んでいました。  
おじいさんは川へしばかりに、おばあさん  
は川へせんたくに行きました。  
おばあさんが川でせんたくをしていると、  
ドンガラコ、ドンガラコと、大きな桃が流れ  
てきました。

これは決して極端な例ではなく、そのように見えているケースが一定数あるということです。

重ねて書きますが、視点を滑らかに動かしたり、視野を広くして見たり、両目でバランスよく像を紡ぐことなど、目の機能は様々にあります。

これらを合わせて、「視機能」といいます。

学校の視力検査では視機能を総合的に測ることができないのが、大きな課題といえるでしょう。

教育に携わる身としては、こうしたウィークポイントについては知っておく必要があります。

以前、1年生を担当していた時のことです。

百人一首というかるた教材を行っている時に、どうしても札をじっくり見ることができない一人のお子さんがいました。

音読も、一文字一文字を順に追うたどり読みです。

「これはきっと…」と思い当たることができました。

一学期の終わり。

お家の方に連絡を取り、入学以前から「見る」ことに関して何かお気づきのことがなかったかを尋ねました。

すると、幼稚園の頃の話から、日常生活のエピソードが続々と出てきました。

話をしている人に注目ができない。

本の読み聞かせ中にどこかに脱走する。

落ち着きがないからと何度も注意される。

しかし、視力検査では何の問題も出なかったとのことでした。

すぐに、先に書いたような話を伝えました。

「目には、視力検査では測れない力がいっぱいあります。」と。

お家の方は、とても驚いておられました。

そして、視機能の専門家（オプトメトリスト）も紹介しました。

学校の視力検査で測る以外の総合的な「見る」力を検査できることを伝えると、すぐさま予約を取られて検査に行かれました。

夏休み。

お母さんから、慌て驚いた様子で電話がありました。

最初の言葉は、「先生、3つもありました！」でした。

目に関する様々な課題が3つ発見できた、という意味です。

詳しい内容はここに書けませんが、その後いくつかのビジョントレーニング（視機能訓練）を経て、その子の授業の様子は激変しました。

「見る」ことに自分でも気づかぬストレスを抱えていたようで、それが無くなったことにより、見違えるほど生き生きと集中して勉強ができるようになりました。

本の読み聞かせが聞けなかったこと。

話をしている人に注目できなかったこと。

そもそも落ち着きが無いと言われたこと。

そのどれもが、「見る力」に難しさを抱えていたから起きていたことだったのです。

こうしたことは、特別支援対応の進んでいる国では、常識的な事柄です。

日本も、早くこうしたことが社会の「当たり前」になっていく必要があります。

「見る」ことに関してついつい話が長くなってしまいました。(すいません)

ご希望があればまた詳しく書こうと思いますが、視機能には大切な力が主に3つあります。

○固視（注視）

○跳躍運動

○追従運動

この3つがバランスよく行えていれば、「見る」ことに関しては基本的に心配ありません。

有効な教材や学習法としては、「音読」や「かるた教材」、「視写教材」などがあります。

いずれも、すでに学習を少しずつ始めているところです。

そして、継続して練習に取り組む中で着実に効果が出ていくものです。

ちょうど、来週から個人懇談が始まります。

「見る」「聞く」「触る」などの感覚について、ご家庭で何かお気づきのことなどがあればそれらを共有してもらえるととてもありがたいです。

懇談の機会にそうした話を寄せてもらえることで、学習中のサポートがより手厚くなっていくからです。

一人一人異なった感覚をもった78人の子たちが集い、学んでいる環境を一步ずつよくしていけるように、お家の方と手を取り合いながら進んでいきたいと思えます。